

L G B Tの当事者と家族の自己形成における心理的支援に関する研究

－ナラティブ・アプローチの視点から－

学校教育学専攻
臨床心理学コース
M08049J
枝川 京子

【問題と目的】

本研究は慢性的なストレスを幼少期や学齢期から感じ始める（日高,2004）LGBTとその家族の語りに注目し、当事者が抱える心理的困難や葛藤を明らかにし、他者や社会との様々な影響の中で個の確立を模索していると思われる彼らの心理過程を分析考察することを目的とした。そこでLGBTの実態と彼らが望む自分のあり方についての仮説を生成し、彼らや教育現場で望まれる心理的ケアのあり方を、心理臨床学的な立場からは、今後どのような支援が可能かを個々の多様性から検討する。本研究の意義は、LGBTの当事者がいる学校現場でのサポートの在り方を明確にすることができ、マイノリティの問題を抱える児童・生徒とのカウンセリングだけでなく、学校の教師とのコンサルティングが期待できることにある。また同時に、校内研修や授業で心理教育の機会を持つことは、正確な知識を得る機会をもつこととなる。そうすることで本人の誤解や、家庭・学校の周囲の人の無理解など、外在する問題の変化が期待できる。LGBTや家族が対他者、対社会とどういう意味をもって繋がり、それをどのように捉えているのか、そこにそのような心的困難があるのかを理解することは、性アイデンティティのサポートとなり、LGBTの性的自己形成を支えることになる。

また当事者の思いを掬い取りたいという研究意図にナラティブ研究は有効である（竹家,2008）。自分の経験に意味を与え、聞き手に伝える語りの行為に

よって、更なる自己理解の可能性も見出せる。また、聞き手は語り手との関係性やそこから紡ぎだされるナラティブからLGBTの経験の重さや意味の深さを考察できる。ナラティブ・アプローチによって、個人差を考慮したよりきめ細かい援助や他者理解について方策を講じていくことを目指す。

【方法】

研究協力者：LGBTの当事者と家族。内訳は当事者4名と家族4名の計8名であった。

手続き：1回60分の非構造化面接を行った。面接回数は対象者の実情に応じて柔軟に設定した。

分析方法：ナラティブ・アプローチの枠組みを用い、LGBT当事者の内面に焦点を絞り、彼らがセクシャル・アイデンティティをどのように自分の人生に位置付けたかを考察した。更にLGBTのエピソードを比較し、共通する心理状態が見出せるかを検討した。

【結果と考察】

当事者4名と家族4名を単一事例として、個人差を考慮した他者理解を行った。それは個々の多様性を重視しその人の人生を丁寧に解釈し、当事者の経験の意味づけを理解・考察するためである。分析の観点は以下の通りである。

- (1)当事者A～DさんによるLGBTであることの意味づけ、当事者の家族E～HさんにおけるLGBTの家族であることの意味づけ
- (2)語ることによるインテリジェンスの気づきと変化
- (3)インテリジェンス・インテリジェンスとの関係性

当事者の語りは、「現在」に焦点を当てたものが多い。語りから、当事者達は「現在」を見据えて生活していることが分かる。当事者の家族からは、過去を振り返り、過去があつての現在があるという認識をもち、職業、家庭、子育て、社会活動に意欲的に関わろうとする語りが得られた。当事者の「今」の語りとの違いは、親世代の「過去」のもつ歴史の長さである。またLGBT当事者、家族であっても、インタビューとの関係によって得られるナラティブは異なり、インタビューの語りの気づきにおいても個人差がみられた。

【総合考察】

8名のナラティブを体系的整理し、語る行為が当事者や家族にとってどのような意味があるのか明らかにし、更に心理的支援の方法を考察した。

(1)自分自身について語ることの意味：語りはそれまでの経験を振り返りながら自己を統合していく行為である。また自分が作り出した物語を、他者と自分とに語ることは、過去に紡ぎ出した物語を検証することにもなる。自己の語り直しは自己認識を変え、自己のアイデンティティを再認識するものとなる。

(2)語ることによるインタビューの気づきと変化：自己の内面を表現することは、新たな気づきや自己の考えを再確認できる。それは自己を統合することへつながり、語り手のこれまでの、これからのライフサイクルの中での自己の位置を確認していく力となり得る。語りによってこれまでの人生を一つの達成と捉え、自分の人生を納得し、現在の自己・過去の自己が整理された時、これからどうしたいのかという未来志向のナラティブが生み出される。

(3)インタビュアー・インタビューとの関係性：両者の親密さの程度によって、語りの展開は変わる。語りの内容を分析するだけでなく、両者はどのように相手や相手の語りを解釈し、それがどのように語りに影響を及ぼしたのかを考える必要がある。

(4)インタビュー回数を重ねることの意味：アイデンティティ発達プロセスの理解ではなく、今、目の前のインタビューを理解しようとする本研究の試みは、臨床場面においてクライアントの理解に活用できる。クライアントとセラピストによる繰り返しのナラティブ生成は、過去や現在、時には未来を往來することで、その後の自覚的な変容を見出せる。

(5)LGBT支援について：LGBTは社会的な不可視性(invisibility)の状態にある。LGBTの支援を考える前にLGBTの立場を知るとは、非当事者にとっても新しい知見を得られる。①学校教育現場におけるLGBT支援…教師や養護教諭、スクールカウンセラーなど当事者の周りの専門家は、当事者が自己決定できるようになるまで見守る力量と自己決定に基づいた個々に応じた支援が求められる。多様な性に対する知識を持ち得ていると、児童・生徒の理解や見立てがより多面的に行われる。また、多様な性の知識の伝搬は、柔軟な視点をもつことで様々な教科に盛り込むことは可能であり、当事者の間接的支援にも非当事者への可視化にもなる。②心理臨床家によるLGBT支援…カウンセラーは肯定的、支持的に接するのは勿論だが、敏感な感覚(sensitivity)が求められる。また、心理臨床家から地域に働きかけていくなど、アウトリーチする視点も必要である。③医療現場での心理臨床家としてのLGBT支援…心理臨床学的に考察すると、当事者を診断の枠組みで捉えるのではなく、当事者の生や性のあり様を全人的に捉える必要がある。④社会におけるLGBT支援…LGBTの支援は個人を支えるだけでなく、環境を個人に合うように変えるという考え方も必要である。LGBT当事者がいかに自己形成していき、それをどのように支援するのか方策を講じるだけでなく、環境との相互作用という視点の援助も必要である。

主任指導教員 富永良喜

指導教員 辻河昌登